閑卷驚奇俠客傳

五編

壹

へ13
3156
17

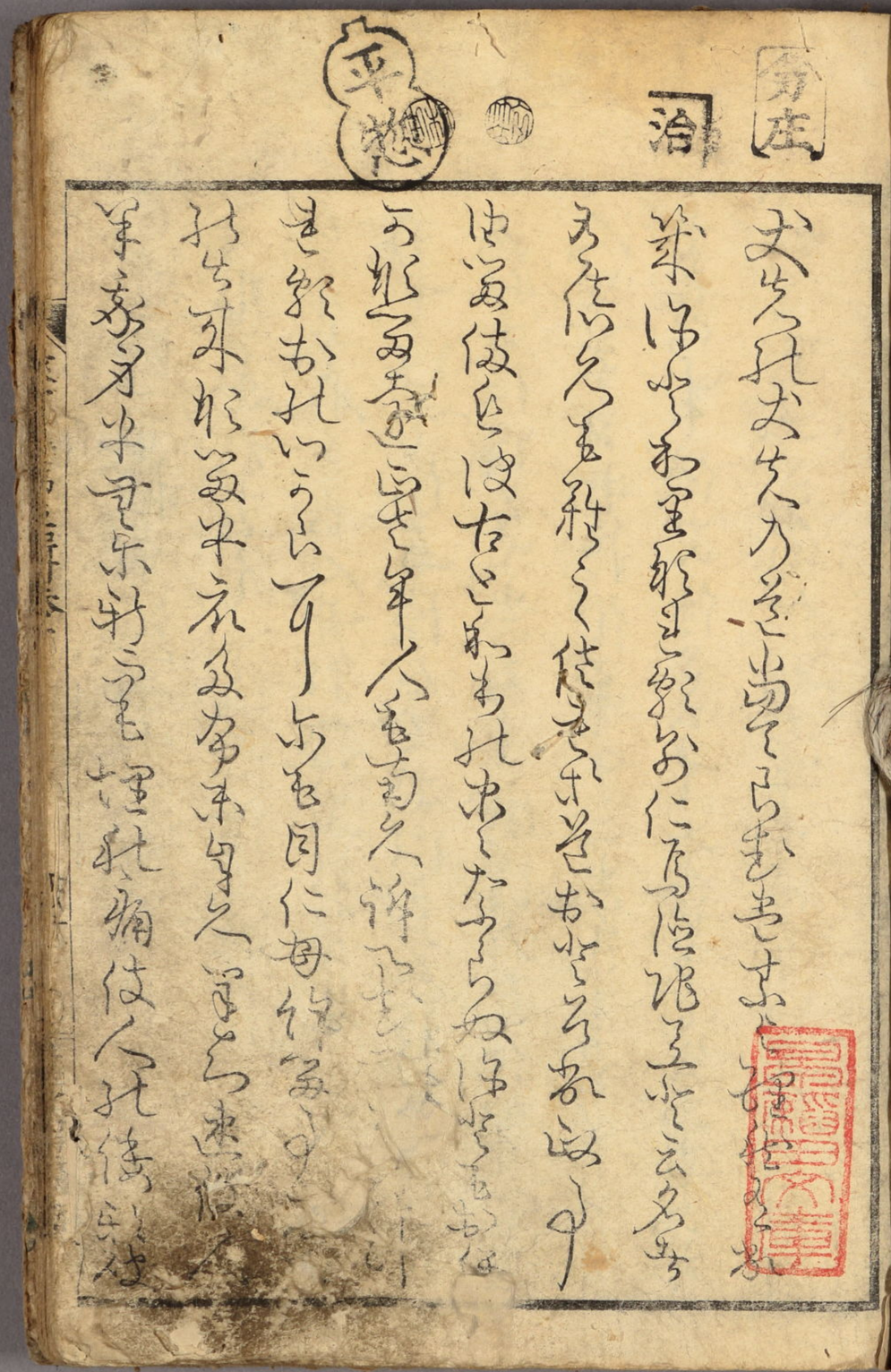
蒜園主人編

開巻驚奇

俠客傳第五集

柳川重信畫

羣玉堂精刊



此道興隆救弊者無不為其道之詞客雅人
宗鑑貞室之已後以迄於此凡幾百哉
年七八十之人無數俳諧果然無窮之詩哉
貞門之仁為德左右於是去無雜亦不少矣江
戸其市仁陸之出者也蕉翁乃宗仁繼之其云
人其尊之物化者也二出無斯者也之傳
已武乃未使之侍之云者道其也生而無不有
椿之已出者仁歸藍未傳其仁生之乎難此讀

佳者也其苗之才數年間田楠木於人之其
胡遂於大法為不仕之其人任者毋乎乎遂
之[illegible]之俊力之[illegible]乎也海之之也之[illegible]來
者仁[illegible]之為仁之之毋以名至什之八求之耳
無因何毋仁者不之新之乎後之古之仁之人[illegible]
業也也者修之出不之之依難矣沙之之[illegible]
兩而之人乃子人其也故之[illegible]之年之其[illegible]乃[illegible]
不是之其海之之之又麻米衣之二盡之後[illegible]

へ 13 3156 17

[illegible]

[illegible]

[illegible]

南北元多岐雲
炮逕易迷忍看
著一局反覆失
東西
垣内城主北畠
俊美卿
堺臣掛橋
和多六
像賛第二十五
歩みの筆心伝
舟ふとすの空使
捨こゝろ水に
鶴形の丸事を
夫面傳計り
船中老僧
法号
赤詳
乞丐不九郎
像賛第二十六

楠正直女
苔子
偏有東君恩
意通當時醜
態自氷融清
操不方桃李
艶請看特地
扇春風
人妻木石
像賛第三十七

侍婢浦風
譽田鷺九郎
像賛第三十八

侠客傳第五輯巻一
癡情未解
花真也
被梅姫
誤百年
櫻原荘吉
破垣與作
金井孫
與六九郎
像賛第二十九
鬼瓶越妖怪
小鶴
與作妻
像賛第三十

開卷驚奇俠客傳第五集總目録

壹卷

第四十一回　豪袁說管領密助奸謀　恭勝乞放免且遇舊僕
第四十二回　媚權門就盛偽君命　逼姪女正直促親事

貳卷

第四十三回　假諾婚姻家寶復舊主　巧揮智辨女俠窘叔父
第四十四回　狼呂岳羽漫售恩愛　痴情新郎暗抱燕石

參卷

第四十五回　肯怒守護議再策　忘義縉紳做擬使

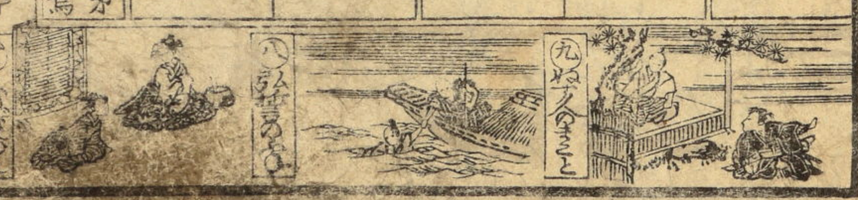
四卷

第四十六回　飛一鍼賢婢捉强人　感奇遇忠士話既往
第四十七回　遠江洋中奸黨溺良善　難波港口老僧示將來
第四十八回　感義騙賊知昨非　授計勇婦免偷兒

五卷

第四十九回　鬼瘤越豪俠斬妖物　楳原宅莊官誘男士
第五十回　受恩忽忘恩　救禍却得禍

總目録終　本集起應永十九年冬十二月盡二十年春二月但第四十九回以下復話應永十九年夏四月事故歲月有先后焉



俠客傳第五集列傳追加姓名目録

将相　北畠三位俊泰卿　きたばたけのさんみとしやすのきやう

武士　掛橋和太六　かけはしわたろく

荘客　伊勢國櫟原荘官破垣與六作　いせのくにくぬはらのしやうくわんやぶがきよろくさく

奴隷　鑣取葉四郎　ひとりとりはしりのしろう　浮屠　逆旅老僧　法名迭ス　ぎやくりよのそう　孫與充郎　まごのよしみつのらう

婦人　浦風　うらかぜ　小鶏　ことり　強人　遠江洋豪傑　姓名迭ス　とをとうみのようがうのけつ

通計九名　此他歩卒荘客奸黨強人之姓名逸者多今亦不挙焉　與前編所出一百二十名并一百二十九名

前集作者の文章雅俗相半して情景と述る事自在と得たり。故書肆勉てその体裁に效ふべき由とのふよ依て崖畧彼口調に摸することゝ成ども各得たる處同じゝ様ひバ竟に全く彼に似るを得ざ怒に我得る所と棄て彼に効らんとせゝ倒る物損ひと做る所も多ゝべし。又文字あゝも唐山の小説中に俗語に採て極めて奇字と用ふるふ。作者の意として附會する類も所見ゝバ今亦それに效ふとすれども。座右に小説の書を置ふ群玉堂頻に遅滞と責ふ依て只暗記のゝ任せられ書事の多ゝると。看官幸に恕察して深く咎めるなかれと云。

開卷驚奇俠客傳第五集卷之一

浪華　蒜園主人編次

第四十一回

豪表管領に説く密に奸謀を助く　茶勝放免を請て且舊僕に遇ふ

再説畠山左馬介持永ハ楠姑摩姫を眷意して其叔父楠式部少輔正直に豪嘱し婚姻の事を説遣しに姑摩姫一切従ざりしゝバ齊天行者豪表謀計の隨に刼奪んとせりしも疾く姑摩姫に悟られて大に恥辱を被りけれ。怒ると雖ども為術を知ず遊佐就盛に商量るに就盛三椿の法を説て媒鳥と称ひしゝバ持永更に歓びて篠持媒鳥に京都への使を命じ歳暮の佳儀と称して國産数種祿齎せ密意を恁々と言含めく手簡を投出て與へけゝ媒鳥は領掌して即て京都へ上りつ満家の前に出事の情由を悄々に報て件の手簡を

遁與ちゝらべ満家是を披閲るに赤坂に下宿て昼夜肺肝を砕きつゝ
さゝめぐに差を換て姑摩姫が荘院を窺へども表皮の光景を知るのみゆて内情の
美に識ぐけ難び靴を隔て癢を搔く心地のみして詳悉らぬ依て愚按を廻ら
ぬに假に他と誓姻を結び宿所に迎へ虚実を捜らば心操亮然と分明るべ
他若異心ある時は既に禀上る如く幾個の勇士悍卒を得るに増て當家の干
城となるべきもの多くべく子孫に智勇の者も産ば上に對しても忠るべし彼及婦女を
浅利餘一が請る先蹤るもの多くべ然して在下色に迷ひて禀たる間に看破
唯封邑の後患を絶て當家開運の吉瑞と做まくもの多くべ倘亦怨敵の志を挿
まば其色顕ばやいべ然べ一個の婦人なり縦令幻術ありとも宿所に閉籠
たるう人は何程のすべるべき結果んす石を以て卵を壓が如くるべ此を能く
御賢察ゆて尊慮に恢たまへ日外五十日槌隆光が夜稠せし時奉取

なる。楠家の重宝錦の御旗菊水の旗代々の古文書那時没官せらるる東西。御
許に在べし其賜まく納采とせば姑摩姫必ず許諾せん這一件は在下が弱冠の
疎忽のみにて河内守に豫め商議るべき情由は就盛が年始の
佳儀に出京せし刻直に禀上る旨ゆべしと記りける。満家は素より愛児の
招来らしめそ件の手簡を指示し老師は何と聞るやらん愚児が卒爾の了
簡に毛を吹て疵を求る端とやらんと危殆し那楠家は俺祖父義深の時う
ちく代を累ねる怨敵るに過頃姑摩姫が獄舎に在しを人をして数殺ん
と為しるものまば冤氣極を解べらぬ萬に一も過差あらば世の胡虜とるべ
し然ども老師の示教もあらと問べ豪衷横手を拍て這籌策決べ
現郎君は今世に多く得難き才子にそと頻に賞して曰く最に貧道法術を

以て那荘院を残る隈なく窺ひ知てけれども姑摩姫が心術の今些疑ハしきハ他
ゐも些少の幻術ありて心地を露さぬまゝとを欺き謀らんゆへ色情ゐ遇るハなく
色慾一番萌る時ハ那幻術ハ尾の如く解て效験ゐなくなるゆ凡て法術の習ひ
さまゝど其人を得ざるうへゐ出家の色慾を説んゆ憚るゆゑゐなれバ黙止て今まで
稟ぎりき然るを即君弱冠ゐ七思召出さるゝ実ゐ凡庸なるまゝと謂べし猶
疑ハしく思さるゝ一識を菩薩ゐ乞なりて其冥験ゐ因べきゆゑと道なるゆ
袂接合せく印を結び眼を閉呪を唱へて念ずるゆ半晌許徐くゐ眼を開き筐
ゐ入て咲てのひけるハ貧道目今神通の三昧ゐ入て覘ふゐ即君の等りゐハ如く色
慾をなく他ゐ中らバ凶を轉じ吉となるゆ疑もなきものゆゑ那姑摩姫が強
情なる父祖累世の怨家として當家ゐ心を措さバ急速ゐ兼引べきゆゑ
ぶも上の権威を以て名とする時ハ忽ゐ違誕の罪となるべけれバ兼引ゆもいべし遊

佐氏ハ此芙を以て計策んとのゆるゆゑ然れども他ハ柳営の御諚とのゆゑも輙く
信容べき者なゆゑハ猶遊佐氏と相謀りて箇様くゐ行ひのゆきゆゑ道なく道なく
なく終ゐハ羮伏稟ぎべし渋くゐも赤坂の御舘ゐ参るゆゑゐハ彼沖天の術ありとも
折んゆハ貧道が掌の中ゐありと其謀畧を漏なく告てなくて一度即君と枕席を
共ゐせバ他が心ハ漸ゐ解て定ゐ皈降ぎべし其ゐも希代の名法なれバ相応しく
ねど期ゐ臨まバ即君ゐ授け稟ぎべし遊佐氏ハ此等のゆを正直ゐなるゆゑ
ゆと他ハ不才の魯直人なれバ姑摩姫が敵手ゐ足る者なゆゑ然ども言を偽なるハ
他なり外ゐ其人なけれバ嘶し哄して逼らせなゆゑ竟ゐハ成就ぎるゆゑ遊佐氏ゐ
今世附て心を用なく助けなゆゑ脱落なるべうもいと貧道も那里へ往て相共ゐ
ぎべけれど嚮ゐ太上皇の敕使と號して姑摩姫と面を聚せ上ゐ千崖萬亀の
嫻ゐ木の端の様なる老僧ハ良しくなれバ此芙ハ用捨しなべし然ども別ゐ檀を設け

男女和合の法を修し且幻術を調伏せり。此修法ハ其男女の本命の支干の八字を以せざるべ行ひ難し呼のり然るべ又箇様くゝ謀らひのゝ姑摩姫が本命を知るよりん是も亦遊佐氏ハ吟味のゝ整ふべ彼主上洛せらるべ試ハ先其所存を這方より問の人貧道が前知しるハ甚も錯ハるべ其ゆ向来の計策も羞ハぬるを知らせの人疑ひのふのふと手ハ把るべく演しハ満家疑忽然ハ氷解する共ハ持永が才智を屢賞らるて満面ハ花を開き東西許多取出て豪表が布施ハ曳き労を謝しつ春を約つて其日ハ暇をらせふけり余程ハ翌年ハ應永二十年の正月ハるまど持永ハ片田舎ハ在けるべ省きて何の儀式も甚だ朝の間ハ近郷の目代地頭荘官等が佳儀演ふと来りしハ對面し家隷ハ命じて遠侍ハて不血酒の式例の如く果る後ハ出仕せべき處もるけるべ花洛の方の春色漫ハ案出らるて徒然るまくハ那婚姻の手段をのゝ右ざる左ざる思ひ

續けて悶然として在ける處へ媒鳥が駿兵回つて来て京よりの返翰ありて泰勝が披露しるべ忙しく把て閲るハ父満家の直筆ゆく那婚姻の事ハも等閑ならぬ大事るべ来春遊佐が上洛の封寛釋ハ繆を商量ら努く急遣て後悔せる其返言の容議の與條持媒鳥ハ扯ゆ措て正月の初旬ハ下せべしと簡約ハ書とう持永とまを泰勝ハ看せて悄をき譚らふう和郎ハ什麼ら思ふらん如此ハ成否ハつるし何とふしても就盛が上洛を待ち旨るべ遊佐ハも尚又這由を意得ぬ世ハ有べらぬ和郎ハ今より大誼るべ那里へ往て悄く地ハ傳へ紙遇ゝ置け明日明後日ハ就盛も必上洛せんぬるハと道ハ泰勝畏まて仰の如事ハ就て願ひならまハ那荷二郎が事ハい他往時ハん便室近く不敬を犯件の轎子ハ躯入て在けハ不測の曲事とハ稟せども原来匹夫の草賊ハ礼法ハ拘る者ハ非ざるべ一且の御憤ハ理るべ一箇ハ遊佐殿の要ハらんとて也せ者

ゐる二箇所又向後ハも用ゐゆゑハ多くふんを那儘ゐしと當館の出入を許ゐぬぞ。
遊佐ゐも不快ゐゐハまんゐゑ右も左ものゐゐ。下臈ハ口の悪きゐ他那時の機嫌
をもまつく識てひべ難面く遇らば世間ゐ漏こともまつく然るべ曲て御免を蒙り
時くハん虎溝へ出入せしめ餘まる酒殽を恵ませゐハば他も又恩を慕ひ徳を感じ
おん與ゐ做るゐものべ。且ハ豫ても稟し如く小可ハ仇持る身るゐ唯一個の若
黨ゐゐく萬不便の縡もゐるゐ那荷三郎が面魂一僻ゐゐべ所見られべ出行ける
時召俱て其頭の要ゐ充んと欲をさるべ除非那白痴物が異心を抱きゐとも小可
斯てゐる上ハ縡ゐ臨みて立地ゐ結果んも亦甚容易し。是一事両用られべ只管
免さゐゐ。と屢云て止ざるべ持永霎時尋思して現ゐ処も一理ゐ。さるども
他ゐ其夜丈輻子の中ゐ躱ま居る大胆不敵ハゐも更ゐ。什麼ゐる事情とも
俺ハ今尚意得ざゐ。然るべ再び召寄て詳く推問せし上ゐさせる不良の心ゐ

ぜハ登時ゐ免除もまべし。這等の縡も就盛ゐ聚面の対譚ゐ見よ。那首ゐハ知ゐる
るゐゐゐんとゐひけるべ。桑勝唯唯と言稟して深菌笠ゐ面を覆ま軽卒一個を
若黨と。奴隷ゐ礼服を含齎せ遊佐の城へ赴きゐ。町盡処ゐく衣服を更め城
中ゐ入て持永ゐ使者ゐる由をゐひけるべ。就盛即て對面して年首の口誼縡竟るべ。
桑勝声を低うして別ゐ悄くゐ稟せて持永ゐ稟ゐゐゐ。霎時れ近衆を遠
放ゐゐゐとゐハゐ就盛點頭て然らば便室へ通らべ。げゐを年始の佳例ゐるべ藤
酒をも一ッ勧めんとて侍共ゐ吟咐て閑室ゐ伴ハば間もゐらせず童扈従ゐ交代ゐ
持運ぶ古昔蒔繪の重筥ゐ故実やきゐる長柄の銚子ゐ。ぐさとだるりゐ就盛ゐ勧ゐ
間ゐ下物も増て思ふぞ半酣ゐ及びける時就盛左右を遐放て。さて左馬殿の密議
ハ那姑摩姫のゐゐゐと笑ゐ問べ桑勝も莞尓と笑てゐゐ那姑摩姫を娶らん
と様く心を尽きゐゐ逸く其机を精せゐるまて再度の不覚を採しゐハ既ゐ知せゐゐが

如し。然るに殿の御計畧ゆえ、父管領へ由を報て表向より媒妁をと娶らんとの事情を即ち京都へ稟しに固様こに回答せらるべし。徒に近日御上洛のより管領の得心せざるゆえに賢慮を希ふ所こに稟まゐゆもいねど、那管領の文體の綺煩重げに所きい〳〵尚念の與在下を使者とし遣参らせるべと綺細詳に演けまば、就盛頻のうち点頭き固様のるに関係いんに俺們のしに用捨もひまど外らぬ左馬殿のおん憑みまるまば愚衷の限周旋しに必整へ参らせべし。酷くな心を苦しめるひそ明后日に上京せるまば躯て管領に拜謁して這儀を計らひ稟をべし。此旨稟上べしと快く諾ひけまば恭勝にまを謝し罷回つるく然稟さば、持水安堵致せべし。畏ていと應答ちつく又道ゆう。綷の序次に在下が願いしきるいを試に稟上んに欲其に別伐に入いらど鄙に姑摩姫が轎子へ秘符を投掛させらまるる放免荷二郎がるに那荷二郎が其夜女のるるゆに轎子の中に躯まて居うりを篠持媒鳥が見露しと。

持水に報ていひしに、持水大に憤りて成敗せんなどゆくまでを在下ゆく賠話せば。さらば遊佐氏の面に對して免せべしとて放まるる。然ども在下が存ぜるに他が面竟九庸なるど一僻ひるべ兇奴なれどを殿ゆも放しべ兇罪を放しと召措せのふらに旦に那夜の私密をも。片端識る者なれば那儘に遠離るべ他怨を憤りて禍害を慮出るるものべし。右ゆも左ゆも久後長く立入しめそ異日の要に備んる両全の義こそべし故に其由持水に稟しに一旦を怒らまされ方僅に殆打解て在下に右も左も計らこのるに就て往く所に看まん在下に餘美なる兇るめそ二人の仇を持て一個に女べ〳〵長るに豆る者なるねどいま一名に男に七萬夫不當の勇力にり。他奴們倘這地に来らば。悍るきゆもいねに只一名の若黨べるけまば那荷二郎を身邊に使ひて。他倘実に飯服せば一方の捍城にるるのべしまべいそ荷二郎を時く赤坂へおさせのべく在下が伴當に俱せんるを許しべとるき脇悦に。といふに就盛異議ゆも及ぎ其弾

右
豪表一識決
滿家抵疑

なれバ意得たり。那奴ハ其翌朝回来まど慈ともしそれねバ。然る大胆を挿きし上ハ拙老が夢にも知ぬ。疾知たらバ赤坂殿におん賠話も稟べき也。緩急の段是非に堅ずとも這義ハ和主心得て品よく稟聞るべし。原来那白痴漢ハ頭を刎べき兇奴なれども希代の騙局なるを以て倒に使役ふ所もあらんと霎時一命を助け措る的なるぞへハ殊更に所用ハなし。倘和主にも使ひまして赤坂殿の御要にもなるものならバ拙老が素より希ふ所之と听て泰勝大に懽び然らバ直に召連帰りて主人に賠話稟たらん。両三日扯措て又そを返しなバあとへバ就盛点頭てそハ随意にせらるべし。両三日など度毎に断らても及ばぬこと。但し那奴ハ心術究めて不敵き奴なれバ逃亡られぬやう小心せらるよ。忽緒にせざる的なるぞといへバ泰勝承諾して杯盤を辞し別を告て就盛が前を退けバ就盛ハ誉田鷲九郎に吩咐て荷二郎を隠出させ泰勝に逓与させけれバ泰勝ハこれを請合て即て伴當に交へて鷲九郎に謝して赤坂の陣館を投して

回りけり。當下夕陽西に落て雪を催す夕旗雲に光映薄なりて曛始る黄昏時候に向しかバ俚の未通女が衝く胡鬼子も手毬の音も外に絶て物色蕭然なりけりし人に荷二郎ともに俱して来れバ泰勝ハ又礼服の貌を更め蔺編笠をも脱棄て世に畏憚ず回り去くに但見れバ去向の樹下に藁薦を鋪破手巾を頭上に捲たる窶たる一個の乞児が几遍となく頭を叩きて声憐しげにもしもや殿様お正月のお祝賀に唯一錢恵まセ賜ひねかしと勧解ハ乞ふを前なる軽卒の若党が声高やかに振絞りてそりゃこそ這奴們道坊に這頭へ出て什麼なりとも片退ずやと罵るを猶懲ずなほ檜桶を突出しもしよりそ御慈悲にと覓縁る間に料らずも泰勝と面を照せて互に驚と駭きけるが物いはんとして那乞児ハ想ひや返さし左右なくいはずもしもや殿様這正月に餅一ッも飽ハせね這身の因果も原ハといへバ身より出たる錆力なり附及せし人なきにも有ねど今ハ又奈何ハせん。他所の軒端を假寐の夢にもなる

往昔ど恨しきのそ一合飲せのそ。ゆよおん慈悲ゐいと口説が如く衝きらふを。那若黨い大ゐ怒り這奴甚大胆ゐ。我主人をば孰とゐ。ゆよ赤坂様の御家中ゐゐ解らぬ詬言諄くと喋さば許し置べきと。襟上把抓で曳居るを桑勝ゆくと喚禁めて今日い大事の使節ゐゐゐ児を食へく作麼ゐ。せんりで那些退て通ぎや現這年の首よう。飢寒てい只願ゐ東西欲ゐるも充理でいゐ。餅でも吃へと畳紙佛を搔捜ゐろく。銭二三文取出しゐ。紙ゐ拈ゐそ撲地と投ばば音を栞ゐ搔拐り上て。数回押戴き天晴お慈悲ゐお愛情ゐ。お殿様のお貺物噫辱ゐ。有難し。ゐ後とても久後くおん目を賜りいへと。追従軽薄狡諄くと几回とゐく咳を。看ぬ態ゐして桑勝い脚急ゐ去過ばば。跟ゐる奴隷ゐ酷やく。你們何時でも今日の如く主人を思ひなゐば當の鎚ゐ外ばゐん。果報的奴と一言を罵りさしとゆく野徑の。竹林ゐ雀の声静まりて。隱く見ゆる燈火の赤坂の舘ゐ帰りゐ桑勝い

荷二郎を己ゐ子房ゐ等せ置て独持永ゐ前ゐ出遊佐ゐ回答を箇様くと。耳語告てその後ゐ那荷二郎を召俱しゐ一五一十を話説りかう仕てゐへ始く前罪を恩免ゐりて在下ゐ預け貺りゐ。別ゐ異心もゐへばそ御婚姻の期ゐ暨びく用ゐゐふもゐるべし。と忠告ゆくしとのひ瞞ばば持永再應の尋念ゐ暨だど遊佐ゐも然様ゐふゐゐば。要時和主ゐ預るゐり。然ばども那奴い癖者ゐれば。小心をゐふまゐゐゐゐ。由断して取ゐ道しそと戒めゐゐゐ許しゐばば桑勝大ゐ怡悦て。己ゐ子房ゐ退き出ゐ急く荷二郎を喚出し。晩飯を与へ酒を喫しゐその身も共ゐ喫啖しとそ悄く地ゐ譚らゐゆう。郷司日汝を救ひしゐよう。與ゐ心を配りゐ。長總奴を覘ひ見ばども未日を経ぬゐゐばば這ぞと思ふ證据もゐ出ぎれとゐ。ゐい他ゐ本意を探らんゐも難くゐゐぎばばば先方便を以て郎君のおん怒を勸解ち。遊佐氏ゐ乞取て箇様くゐ料理ひくばば今日ようしゐ俺方ゐ和郎を措とも異うい

前篇の作者多藝と誤て多氣に作る多氣郡名古屋昌殿の城下多藝とは別へ然るに今更其誤を改む多氣多藝作るものは省官の為に紛らはしうんとてこ

あらぎ。但時々遊佐の城も回りて那里の容子をも。覘ふとそ。ようこわまさて久後へ憑ひ。べき大事もあるまじ。幷ようも。覘面りて和郎を労をべきものなり。幷へ方縄回り路ふて。東西を乞うる乞丐奴ども。那奴と面を聚せ。時何とゆゑん認得さる。的ゆ肖たりと思ひしるべも。急ふい案ひ得ざりしふ。徐ふ考まべ。他へ俺身が伊勢の多氣ふて。使隷ひする草履取ゆて名を敵介とふ的ゆ。嚮ふ稲城が女児信夫を豪奪して。其父親の丈作奴を殺しする時も。弁田與記右エ門。山勝杢内とふひし若党と共ふ密議ふ関りしが。繆食露顕ふ及びする時。與記右エ門杢内へ斬罪せらまし。敵介へ追放せらまね。然るふ介後怎ふして。那様体ゆへ做りふけん。左ふも右ゆも俺を認りて。敬馬きする体なりしが。言を設けて哀憐を乞ふ意を急く猜しまべ。仂銭を取らるゆうふて。金二三歩を與措しうさても猶俺這所ふ在を若党の軽卒奴が高らふ言聴せまべ。那儘ふてへ棄措ぐし。さの。他奴も聊の才覚ある的ゆ。

奴隷ふして駈役ひが宅の的ゆへ勝ゑ。倘打棄て顧眷ぎへ他つ怨みて仇ゑを的の。幇助ふらぎたものひ難し。さまべくうぐ這處へ曳入んとへ思ども。乞丐の形でへ外見ゑ。内と和郎を労まるゆ今より他奴が在處を見ねて。繆徒と説听せ這金を。ゆて身の装ひを他郷ふ至り調へく日数を歴てさり氣無く。訪来るゆふ料らふべし。よく酒喫て快く往ね白昼ゆへへ妙ゑらぎとて金一両を遽與ふしが。荷三郎異議なく領掌して。幷へ奇妙ゑるゆふい。他奴が且那を認着して。繆ゆ氣ゆへ推査しねさへへ伊勢ゆて使ひのひし。敵介男でいくさぶ急く喚寄られて。あん便利ふるゆひらん。ゆて一走まるゆて来んとそが俗立て往けるが平時ゆ。ゆて立駆り仰ふ任せて那樹下ふ見ねゆきそいひしふ。幷処ゆへをらぎ遥ふ這方の灰廬の軒下ふ。寐轉びうしを喚寐しが。繆由を説听せしふ始へ匿ぎうしゆ。竟ゆへ実を吐て。那敵介へ去稔の春。且那と共ふ伊勢國を追放せらまいとも。

素より他邦の親類もなく然とて國中の徘徊せば捕へて斬るべしと聞えしに辛うじて大和の立越え高市にて吟びて賭博を好むと銀一錢の本錢なくて剥盗を業とし性弱人どもを嚇しては些の本錢を設けつ食博奕の輸盡ければ伙家の奴們が醜躰を命て無底の不九郎と喚びぬとぞこの底の無き嚢の東西を入れも留らぬ如く他が博奕の下手なるを嘲る共の鴟鴞の鳥が夜く小鳥を取喰ふ剥盗を擬へて秀句なるを敵介の悟らぬと自己も不九郎と名号くるとのふなるは可笑きのみにて徒に或時一人の旅人を剥んとしるの案外のその旅人が心剛なる手利めてなりしが股と肱とのあらるる痕を二箇所負せられ跟迹を晦まして逃げ去れども其痛大の發しに腫上りなりければ辛くも残金を懐にして龍神の温泉の赴き三廻り浴して愈れども衣服は更なる脇差を賣て病費の充さまべ更の亦剥盗もなるべき為方もなく落魄て形の如く非人の成下りなりとの人。

偖て剛才且那を見て不審めひしくに言を設て外るべく。身の不造化を訴てば果して三歩の金を貸ひぬ明日は垢衣の一領も買ひて来て這御館に参りて訪ねまうんと思ふ折ふし又更の和主を使に賜りなくて一両を賜へまば天の登の心地せり快く他郷に走去て打點を整へいば就て参りて拝謁せん其時意衷のなどもは尽しとおん禮禀をべしとて大く歓喜ひりさまば不日参上せんず必定ふいとのふ恭勝点頭てさては那奴は心易り来らば情由を郎君に禀上て這方に留めんその序次に和郎が綜も尚克提成禀し置て恩顧の者に做べべぞ心長く時節を待ね俺は今まを獨身にて萬事に心細くるに今様に運直りしやは年の元月の元日の元なる今日即時和郎が幇助を得べきに来集べ世に怖しき的いなしいざや祝寿に喫くと又殘骸を取出し拄杖の荷二郎も矣坪に入て更闌るまを醉を尽して其侭倒まく寝なりけり。

第四十二回

權門ふ媚て就盛君命を偽る
姪女ふ逼て正直親事を促す

却説遊佐河内守就盛ハ正月三日ふ河内國石川郡を打立て京都ふ上り将軍家義ふ年始の拜賀を稟しける。繹果て管領畠山尾張守満家の邸ふ到り同く佳儀を演けるに。満家就ち書院へ請ぜ。恒例の式竟て後所要もなくば今暫く此處ふて休息せらるべし。公用果るば緩くと御意得たるるきふも非ざと就盛を留置て満家ハ室町殿へ出仕しけるが亭午過る頃回り来て。閑室ふ招き入れ茶を點ず菓子を勧め更ふ杯酒を整へて。就盛を管待ふ左右を遠退て膝を合せ耳ふ口ふ知らず如く姑摩姫が去秋五十日槌電次を討る驍勇智謀の賢き事驚くふ餘りあり。時間ふして棄措ば終ふハ國家の禍害をも曳出さべく思れしば愚蒙の児左馬介を萬事貴殿ふ打憑まて八九の荘院を接察せん為赤坂の陣館ふ遣しるふ想係なく那姑摩姫を拙児ハ娶らんとのおもせぬ強ちふ色ふ溺まて所望まるとも聞えねども他女が強情る決めて隨順ぶるるハ鏡ふ映く看が如し。任他道ふ路なくして假ふ親事を許諾をとも弱冠の拙児が配耦ふ手ふ餘ることる心地して持煩ハんと危殆くもふを貴殿ふも商量しうとて遍いさるるふハ但し在下が存ずるふハ女ハ總て水性る的るとば除非姑摩姫只今とて父祖の遺訓を一涯ふ守ると任情を稟ずとも一度枕席を交しるば漸く怨恨も解ぬべし。さらば憂を一轉して歓喜とるるもとそ以人好世まで異心あるふもあれ迎へ拿せのひとハ畢竟一個の少女子る。四相を悟る才ありて幻術を能とと怎程のるらんべき。齊天行者豪衷が法力もいべ開ハ怖るふ足ねども南北朝おん事と累世冤家の故をもと決して従ひ稟ずまで。因て在下が存ずるふハ是一

上へ稟上ておん旨を請のひ南北両朝御和親のうへ其臣るふ遺恨のぶぶ。楠父子の輩へ代く南朝のおん與ふ屍を戦場ふ曝しる忠心無二の将うれ。
亡後るきを憐みのふ。僥倖ふしと姑摩姫のうさまども女流のるうれ所領を與へん。
臣ともちぐ〳〵。依て畠山満家へ父祖の時より河内を領しと代く楠と鎬を削り奮戦
最弟一〳〵まバこまゞ末子左馬介持永を姑摩姫ふ配耦せて秦晋の好意を結ひぶ。
寃氣始て氷解しと永く恭平の瑞へるべし。然らば久後持永ふ楠氏の舊領を支ち
與へて出生の児ふ楠を名告せ。祖先の祭祀を嗣をべ。就ては先その納采ふ嚮ふ没官せら
きる楠家の重宝錦の御旗菊水の旗且へ亦正成己来の舊記ども を更ゆて音
物とをべ。とのゝ大槩へ整ひいん。恁て他が叔父正直を嚇をふ威厳を逞しうして
假親と做し。姑摩姫を介抱しと赤坂へ嫁らをべ。若舊怨をるふも称へ命ふ従ひ
をふぶへ。姑摩姫へいふも更う。正直も違諚の罪を糺さまて重き科條ふ處せら

べ〳〵と吃と嘱命るバ。綽十二分ふ整ひるん欣俤ても姑摩姫従へぶ。将軍家の今を
听ぬを名として結果る法もなるべし。又正直も他ゆ恐ふ違諚の罪を裝るといと。
叔父を害する悪名のまバ必従へぶ。愚按へ如此るまバさて左馬殿の内商
議ふ。加へりてとそいるまさまども賢慮ふ恢ふ欣覚束なくいとゆふを听て満家へ
肚裏ふ想ふ。げふ豪表が前知ふ違へを就盛果して将軍家の御諚を必ず
せんと説り。然らば向来の綽どもく必行者が神占ふ漏るるハるべるぶと疑念
忽ち解しるバ想ひを光介と打笑てゆるる趣旨意を得るる。嚮ふ行者豪表ふ
這一條の吉凶を問しふ既ふ貴殿の謀畧を一事も錯へを前知して遊佐主殿
春上洛ひらバ箇様〳〵ふ謀らるべしと甚妙計なり然まども尚ひて他を
南朝の餘蘖るまバ。上の御諚とゆふと雖ども。死をもく推辞むすもなるべし。且
正直へ義絶の叔父るり。今へ上の厳命ふて。姑且和順をとりくども心を放をるも

みけまゞ他一名のうんなどゝ頗るゞき氣象ゆゝ。依て今此妙ゞるゝ處ゆり同じくい
嵯峨の太上天皇の勅諚ゆて正成が後を憐ませゆゝこゝゞ此事必然成就ゞ響ゆ
一千金を貶ひ〜折も柳営ゆ對〜ゝりて。さゆゞ不敬の語を吐〜も太上皇の恩賜と
めゝゆ。推辭うれゝ〜那金を受納やうる光景ゆて。この成否をゞ知るゞ〜ゝゞ。這說ハ
如何ゆるゞき。とゝゞ就盛只管ゆ横手を拍て感心〜今ゆ始ぬ行者の神通今番
在下ゞ秘策を急くも知て告らまうゝ。回もゞも怖るゞ〜。汗ハ尚其該の縡ゞ〜太
上皇の勅諚ゝよくも接ひ着きゝう。智畧とゝゞ法術とゝゞげゆ這うへの妙策ハゝる
べくもゝゞ。とゝゞゆ滿家手を掉て這箇ゆ一個の難題ゝゝ人。這一件を明く地ゆ上
ゆ稟上ゞゝう。汗ハ想うても省ゆゝべ〜。怎の所見ゝる縡もゝきゆ父祖代ゝの怨
敵ゝう。楠氏の孤女を娶るゞどゝゞ反く其ゞ御猜忌を蒙るゝもゝゝん上ゆ諫者の
口をも閉くゞ〜。且今年ハ御讓位の御沙汰もゝゞ汗時ゆ。姑摩姫怎ゝる叛心を

抱ん事も料りゞ〜。這ゞ旁然樣の縡を。當職ゆ居る俺們ゝり自今ハ稟上ゞゝ
う。假令聲姻整ひうとも當分ハ秘措て決〜口外をゞゞ。偖箇のゝく姑摩
姫が。另心ゞきゆも究らゞ。汗時ハ謀計の與ゆ要時持永ゞ妾の如く召使ひて試ル
と縡も無氣ゆ稟上て。遮莫姑摩姫肯ハゞ〜て縡倘変卦ゆ暨ひゞゞ。太上皇の
勅宣とゝゞ上の諚意とゝゞ〜事の倘御耳ゆ入とゝゞ罪ハ俺們一家ゆ在ん這
義ハ怎麼ゞゞうん。とゝゞ就盛小首を傾け。ゝゞ仰ゆゝゝゞ甚ゝ賢慮ゆ過
うる欲好些姑摩姫這機を猜〜て兼伏せゞる事ゝゝゝ。當今在下ゞ手を超て
何處ハ出て訴訟ゞゞ。家隷を京ハ陟ゞゞ。その訴訟ハ管領の必所知ゆ係るゞゞ
是又防ぎゞゆゆ易〜。汗ゞゞゞゝく然る縡ゝゝゞ道程ゆ聞者を出〜指て備ゞ
院ゝう京を望て走陟る的ゝゝもせゞ暗擊ゆ〜て口を塞ゞん。這等の縡ハ機ゆ乘
変ゆ應じて在下ゞ。禍害を防ぎゞ〜。ん心易く想ゞゞゝ千ゆ一個も縡發

覚ゆ。貴在下が身ゆ曳負て肚撥斬ん分のゆゑ。這是累世御被宮ゆる鴻恩ゆ報い禀をべき微志まだふいとさも潔白く道放てば。満家大ゆ歓喜と咄憑しき貴殿の義胆這上ハのべきすゆし。除非這綽發覚て貴殿の身上ゆ係るも。俺們が恁て在るうゑい身ゆ代て救ふべし。心勁く想ゑとよゑゑも這ハ千一の事。這妙策ハ豪表行者の未然を査せし神美うまゑば成就せんの疑慮ゆし。さまゑば決めて那些のゆも心ゆ莫懸らまゑと。左も右も這一條ハ貴殿ゆ任せ禀ゆまゑば。隨意料理せらるべし。尚豪表の所説ゆハ。姑摩姫ハ幻術あれば。綽を左右ゆ假托て遁るゆもひるべけまゑば兼諾しゑるその時ゆ他が本命の支干の八字を。證据の與ゆ寫せの人抑八字とのゆゆ。漢土後世の婚禮ゆその媳婦の産まゆる年月日時の支干を寫て聟の家ゆ贈る式ゆそとを庚帖と喚做ゆ。我上古ゆ婦人の諱を丈夫と定ゆる男子ゆ名告らと相肖ゆる意ゆとハ我邦の婚姻ゆハ未例ゆ記ゆるまゑども。姑摩姫ハ文学ゆまゑば。那些の縁由も知りゆるゆべし。他日違変のゆゑ契据ゆハ必逼りて寫せの人且その本命の支干を以て調伏の法を行ふ。那幻術ハ忽破まゑ。縁を結ぶゆ至るべし。と回ぐも説措ゆ。此義も充く意得く正直ゆ傳托せらまゑ。両三日の中ゆ那楠氏の重宝を齎して篠持媒鳥を下べけまゑば當下ハ恁く料理ゆるべし。這餘のゆハ時ゆ臨まゑ脚力と道ゆとせられべ。頓ゆ回答をまゑべきと。綽脱もゆく誂囑まゑば就盛ハ懐中より矢立の筆を杷出て畳紙ゆ這等の由を未女く記て羮諾を満家殿くゆ安堵して童扈従を喚出して更ゆ銚子を加へさせ酒肴を増て就盛ゆ自ら酌して強勧けまゑば就盛も怡悦て醉を盡して恭うやくゆ辞して旅第ゆ帰りけり。然而就盛ハ其詰朝三管四職と首とした知音の方を打巡まゑて年首の佳儀を述竟り。恵昏頃より京を出て河内國へ立回り。就て赤阪の陣舘を訪て。持永ゆも佳儀を演今番満家と謀り

首尾を箇様〻と低語示して如此ゐゐべ。豫ての計畧十二分ゐ整ひぬるりと。いゐ持永大ゐ歓び手の舞足の踏を覚えど既咱東西ゐちらるが如く漫ゐ急遽るを就盛ゐ推禁めて声を悄め。偖ゐ謀り課せまとども。那姑摩姫ハ軽〻しき婦人ゐ非ぢゆべおん心長く等せゆゑ一應二應の往復ゐくゐ決して會得ひ禀ぢらぢ。京都ゐ遣し措きて。篠持媒鳥ゐ厳君の令舎らるく我もひまバ。他ゞ下着の其上ゐて正直ゐ禀與せべ〻必忙まりゆゑと重復戒めて就て城へぞ回りける両日を經て満家ハ篠持媒鳥ゐ密策を授け。去秋隆光を誅せ〻折遊佐が許りおとせる。楠家の重宝を納うる筥を将軍家へハ披露せど暗くゐ己が許ゐ留措くるを齎して。伴當花麗ゐ装束せ。遊佐ゞ城へ遣しけまバ。遊佐も寔ゐ畏まくる面色ゑて。媒鳥を上坐ゐ請就〻ゐ。誠意の旨を聴〻ゞ媒鳥即ち一揖して豫て吩咐らまとうる如く。太上皇の恩勅と室町殿の誠意の旨をいと鷹揚ゐ述けるゐ就盛

謹で羮り聽て有司等ゐ商議と正直をぞ喚せける。就盛が低料理ひ〻故ハ俺城中の甲乙ゆも。机密の漏んるを怕れて。満家と喋〻合せ寔ゐ京より命令ひ〻〻像くゐハせ〻正直ハ低るべ〻 夫夢ゆも知ぢ室町殿の内誠ひりとぞ遊佐の城へ使来りて。即今来臨せらるべ〻。とゆひけまバ怎麼緯ゆふんと駭きて快く時服を更めて。伴當を忙ぐて。遊佐の城へ来ゐけまバ就盛書院ゐてまを請〻。媒鳥を率て出て来ゐ那皆姻の一條を緯長ゆゐ説吩せて太上皇の勅書を見ふべきゆるまとども。畢竟一家の内縁ゐ面正〻く公法を用ゐらるべくもひいねバ。特地と御書を賜ふ〻然まとども。姑摩姫ゞ疑念るきゐも非るべき欤因て柳営の御内書を管領ゐ賜ふる者〻まとを以て與据とせバ姫も疑念るゐ〻と。又那重宝を納来ゐもべきゆゆ庚怕を寫〻むべきゆまでをと厳くゐ命遞与〻ゆまバ正直謹で頭を低熟吩て大ゐ驚き且ハ呆きく為術を知ぢ迷惑一身ゐ輻湊する心地いきまど柳営の御誠とゆゐ力なく。

仰の趣逐一ふ畏ていと先御請を稟りさて就盛ふ打向ひ語の端を更めて河州い怎と听ゆふらん。想係るき院宜御諚畏ていへども進退谷る心地して云へい其故い前番左馬介殿在下を招きて姪女が婚姻の縁を頼るふ黙止がてて郷里へ立超え言を盡して説くれども他い一切肯ぜ固様てふ稟断て強て其ば女僧ふ做らんと稟いう今番い开と等しくふねど知るく如き任情的ふて在下とも平素ふ疎疎けまバ偏窟ふ推辞をるべ。きまバ貴老のおん提成ふて這一件の媒妁ハ只管御免を蒙りて餘人ふ仰屬らまんゆう。管領家へ仰達せらまバ無比類幸ふと恐るく推辞んとまるを就盛听て居丈高ふるり。开い又怎とゆるるぐぞ听るく如く上のミるぐぶに太上皇の叡慮より出さる恩勅るるものを貴方叔父の身分として唯一女子の今姪女が固辞せらまんとて一應の傳達もなく這仍ふ辞せらるくハ道難るべ。嚮ふ左馬殿の憑まさう。事いゆるるく知らねども。开へ普通の縁譚ふて熟せざるも又世の常

るり。今般いそまとハ同じくらぶ固辞せらまるバ違勅違誕の罪を糺さるくるものぞ。這縁い管領もく人もく稟さまさう然でも貴方ハ辞せらるくく心を定めて回答ゆれと想ひの隨ふ窘ひまバ正直い大ふ鬼胎まを不慮背ふ汗沸て辛うぐと陳ずるゆう然業まバいと恐懼し。違勅違誕というこうへい再遍も再く遍も姪女ふ稟喩まぐ管領家へ這曲を宜く憑ミ稟まを但し姪女が強情るる竟ふ遁るく呀るくバ怎様の縁を稟ー出んも料りがて寔ふ當惑至極せりとく慮ぐ歎息しうりぐ就盛ゆうやく面を和らげ。然らバ兼諾せらまーみおん請ゆうー趣い在下解道稟上てん开い安心やさるべ。然而怎いふものくら寔ふ賢姪女の義烈驍勇智謀幻術兼備しくれば容易く納得せるるまぐ貴方のい苦労査入さう。然まども上の御意ハ畢竟貴方の姪女るまバと思召る而已ふと然る紛雑き情由まぐハ知食べきゆうもゆ。然も推辞過辞せらまるバ必御氣色及くと在下まども御不審を被るるも有へけまバ克

謀畧を籌と左ゆも右ゆも今、姪女の許諾ひつやうゆ料理まとよ不肖ゐれども在下も共ゆ商量ゆ預るべけまバ先ゑや那里へおん旨を傳へ怎様ゆいろ〳〵やうん思巻を吹尋思もひらんと好意ありげゆ私語バ正直聊想回しとさらバ直ゆ八九へ赴き姪女ゆおん旨を傳ふべ〳〵倘左右と辞をゐ貴老のおん指揮を乞ふ縡ひらん萬事一昧地憑ミ稟もと繰返し〳〵道措て馬を急めて出行けり再説姑摩姫い前番如意宝珠院の上墳の路次ゆて奸人どもの商量りく畧奪んとたくらけるを快くゆ猜しと寄計を設け辛く虎口を脱ミ回まバ復一郎安次も遊佐の城より回らん居忙しく出迎へて轎子の見えねを訝り問バ姑摩姫バ徐ゆ便室ゆ入て安次と垣衣とを身邊ゆ近着有り次第を語るゆぞ安次思ひぎ拳を握り开い安らゆ縡ゆい按ゆ持永熟盛们前般の遺恨を挿ミ豪奪せんと謀りしらん在下も今日遊佐の城の役所へ参りひしゆ遠侍ゆ等せ措て公用繁多るまバとて就盛ゆ出て来ぎ一晌餘

安閑と時刻を移し〳〵後誉田鷲九郎とゐ人男を出して這里の荘院の田畠の多寡宅地の来由まミ宝珠院の智正禅尼ゆ御所縁の有しるゐぞ尋問ひひいかゆ在下各へて稟ゆバ智正禅尼バ主人の姑く這縁故をもと幼少の時バ那里ゆく成長ね又荘院と田園バ在下ゐ父隅谷維盈主君を親育せん為ゆ當時室町家の御法なりと買牟ゐ其折の沽券契据の文書在り貢税い村長らゆ〳〵まゆく相違與ひへ他を喫て問ゐべ〳〵と稟て回りひひね按ゆ是程の縡を以て在下を招くべきゆも非ぎ査ゐ所就盛ぬ〳〵も件の机密ゆ関りて在下をおん伴當ゆ立せ〳〵とて招きて隙取せゐゆぞひらん今日ゐう後バ在下がおん跟隨仕まゐらぎバ怎里へも出させのゆふと或バ怒り或バ歎きて悄く地ゆ諫ミバ姑摩姫听てうち頷き你ゐ明査此一も錯ゆぞ就盛も持水ゆ荷臍と你を喚せゐゆふとそ儘道他们ゐ謀らんとたとも怎程のゐゐ有べきゐまども現小心ゆ及とゐけまバ今後バ何方へも戸外バ用捨をべきゆ然まども他们も亦這儘ゆ止べき

るゝれば又術を換て二遍三遍も謀んとて較計るゝも隨分内外ゝ心を配りて脱落るきゆうゝ為べき時ゝ臨みて變ゝ應ぜる籌策ゝ幾個もひらん酷なる物を想ひそと駭く色るき形容ゝ安次ゝ更るり垣衣も开明査ゝ感服と萬神〻しく こゝでせゆゝ後安くゝいものゝ。執念崇る奸人の多有を亦怎ゝせん心の賢ひゝん ゝど隨分小心仕らんと言禀〻とぞ退きける然まゝ復一郎安次ゝ垣衣と商量て内外の出入ゝ心を配り農夫們ゝ怠惰を禁めゝ些の由断もせぎるゝ或日補正直ゝ伴當夥多連率て不意来ゝけまゝ安次則姑摩姫ゝ告て例の書院ゝ近へ入まゝ姑摩姫も衣服を更ゝ出て年首の賀儀を演ずの口誼竟りけまゝ正直ゝ貌を改ゝ今日来る緯另弐ゝ非ゝ持永管領ゝ密訴やゝけん室町殿の御諚とて遊佐の城へ在下を招き箇様〻ゝ道まうとて就盛ゝ傳へ〻旨を脱漏もなく説出ゝて既ゝ怎る上るゝゝ在下とても脱るゝゝ路なく再遍這首ゝ来まるゝ和女郎ゝ

胸中を查せざるゝひるゝれど寔ゝ止緯を得ざまゝ這上ゝ理を非ゝ曲て御諚ゝ從ひなるゝ〻嵯峨ゝ坐を上皇の恩勅とひるゝゝ父祖ゝ對て遺訓ゝ戻るゝもゝへゝらゝ若又和女郎ゝ猶悟らゝて強て推辞て從ゝまゝ違勅違諚の罪とせられて不測の禍害與るゝ。怎ゝ正直ゝ身上の安危も开首ゝ量難ゝり然まゝ和女郎ゝ與而已るゝゝ在下一家を助ると想ひて御禀せるべしと他のゝ又自ゝも拿交へ〻喻し貞るる語を听て姑摩姫ゝ想ゝゝ怫然とせ〻色を稍咬嗽ゝ紛らしと肚裏ゝ惟ゝ持永のゝゝゝ持永のゝゝゝ満家就盛商量て叔父を嚇しと前憾を尚も遂んとるゝゝとそと想ゝ些とも愧らゝゝ面を端しと静ゝ道ゝり想ひ係るく妾ゝ室町將軍のゝゝゝ嵯峨ゝ坐を太上皇ゝ大御心ゝ懸させゝて。叔父君ゝ令て持永と婚姻を勸ゝゝと最も恐惶き辱ゝ數るゝゝ身ゝ餘りなまゝ快御禀を禀ぎるまゝど聊存る仔細もなまゝ是非ゝ及ゝ固辞せるゝ

正直逼苦勧婚姻
正なり

こまひめ
やまとつぐ

這上意を以て然るべく仰上らるを賜はるべし。任地違勅違詔の罪とて甚麼樣の令
属らるるとも是非ゐ及ばざる次第なるべし。辞をべき所もなくいと縡も無げの道
放てば正直の端息を衝き霎時困じて忙然うしを惟回して又の安うそは道なく
縡なるべし。普通の道辞とのべきのを然だらばゆへ禀上げざる。和女郎ハ公界の形勢を
知れば。恁一時地ゐのがるるとも。如此嚴重なる勅詔御諚を怎と陳ずる道理もなく
情ゐ任せて固辞をとだらりへ禀上べきやうもなし。和女郎が恁も道んとを在下ハ原
是知べ這媒妁ハ一向ゐ推辞うしゐ。就盛ハ箇樣なゐ道をう。然るべ怎の
解説もなくてハ怎で回去るべき。克想うても看らるべ。以前南北両朝と立も另れ
御晌なるべさる縡も有べけるど既ゐちん和議整ひて太上皇今上の御父君と御坐を
其政令を主宰らるる。室町殿の命なるを和女郎一已の了簡もて然無殺ハ禀難く
曲て義允せらるるべ三方四方平穏ゐ縡済べきものなるべ再三再四尋思とをられよ

うと諄々しのべ姑壓姫莞尓と笑ひ淡き女児で仕るべ公界の縡ハ知ぢ仕るどさん
うの事ハをきても。理義を辨へしべ最初より仔細を禀て推辞ひハ難くもなくねど
さてハ女児の人悪氣なる。議論ゐ亘り。且ハ亦至尊の恩命ゐ對しなりて言の過失
恐惶もひるべ。特地禀さぎひしうるさるども然だらばゐ宣で仔細を述ぎる縡なれば
叔父君のおん前ゐて最も無礼くハしべども意を静りて听の人抑今番婚姻の一条を
太上天皇の恩敕と禀さるるの妾ハ一切意得匝し。開ハ惟うても看のうし。主殿太
皇父祖三世の忠功を思看ゐもひるべ當今嵯峨へ御隠遯のうへて南朝忠臣の
のへのを室町家へ仰出さるべしや。除非又仰出さるとも義持決して從ハ
らじ。開故如何と推ても看の人。往明徳中御和親の晌さしも新言書ゐ載
御両統交互御代を知食べき御契約義持ゐ拒まるて今ゐ立太子のおん
うきゐ江湖上の風聞ゐ。伏見宮を取立て宝位を譲せのハんるの。近きゐ有り

稟もなく虚説を知ぜられど太上皇の勅命を聊の事までも辞せらるる義持の意をもつぶ是等の重き御契約をば打ち捨て快く料理つべき該なるに并を除て女子一個の婚姻の縡を左や右や提撕るとを心得ねまぶ是ぬ另に仔細の必ずつべきなるべくし。任地をば左まれ右もあれ。假ゆも勅諚とあるべ人賤微き身なれ掣しと所志をのべくへいらねども。所い縡がらふとを依ゆ今ふもあれ御受禅の御詞言の違ひなぶ上皇必御憤あり。旊舊好の輩を召きるひらん欲當下妾室町殿の家隷なる畠山持永が妻とのぶ怎まに向て節操を立ん父祖の遺訓に乖きる千悔其益なく亂離の人とるらまく而已蓋先代のおん眄に肩を比べ足利家の家臣妻にるらん事に好くもあらねど。御前約毫も錯たぶ小倉宮の大御代と成る縡めらん所時に時と勢ひとに因て只麥家系をのぶべくもならぶ楠畠山の怨讐畢竟忠義の與るとのぶ和解も所首に與らん欲這に今に設ぶきに非ぶ

當時のさるに楠家の舊忠を賞せらるんとらぶ甲斐なき女子を立らまとも。叔父君正しく坐せば畠山が河内の守護とる召放さて叔父君に一圓に賜ふきに。るくしと叔父君に結ゆ采地を削らまのひ更に奴家に畠山が所領を分ちて當郡の内にて僅の地を賜へんとに御諚とも覚えひぶさて又禮記の文に據て我父没しのひ上に叔父君を父とし其命を聞て嫁せとにつも奴家に意得難くにり稟に悼ひつるに祖父頭殿左馬頭正義を云足利氏に降參しのひしのに太力折を勢究りし故のに非ぶ深き御慮おいける御事に義まぶ平しく功を遂のに病て斃のるりん那周公ぶ恐懼の日王恭ぶ謙讓しける時死ばとのひし白居易ぶ語に曰くしく成果て家の汚名に削りぶし是故を以て伯父勝も父も忠義の二字に想代て父に弓曳き及を交て互に絶交せられり。我身當時人質とし北山殿の傍近く召使るまのひしぶ這頭の情由を知ぶに在り。竟に足利家の昵近と做て嫌忌に在ぶ然る故に今まぶに正しく親族の間るれども

猶疎そ〜しくるを。過し頃室町ゆて。得難き命を助られたる。其時よりゆん身を隷らる。萬事後見と憑べき由義持のいへるを。御前約の絆ハ十分ゆ遂ぜうへぬ間ゆ。當時天下の権柄を執事さく将軍家の。太上皇の恩勅といへ〜仏ゆ前義を棄て。屈て和議ゆ曁び。徒ら這ぞ御受禅の。絆まむ迄ハ誠意なくとも。ゆん身の猶子ゆせられん絆へ。御免を被らべく想ひけり是私のゆふ非ぞ。父祖尊霊の御遺訓うれバ。ゆん身と海ゆ。聞るとゆ。次ゆ去妹強盗ゆ夜稠の晌ゆ紛失せ〜。當家の重寶錦の御旗菊水の旗已下の物を。婿引出ぜらるんと。満家のゆ〜ゆ。天下の政刑を司ぞと理非を糺すべき管領の詞ともあるべ。奇怪。那夜艾強人が。件の東西を盗み出して。拿去るゆ分明ゆそ。當家の重宝ゆ究まらべ。急ゆ返賜ふべきゆ。さゆ〜と一言の穿鑿ゆも及ばず。開伏ゆて没収らるべ。是怎る道理ぞや。縦計那御旗ゆ髣髴ゆとも開縁故を明らゆ此方へ告て。道理るべ。没官せらる〜。絆も有んゆ。る断もなく。徒ゆ室町家ゆ。

管領家ゆう識ひど藏〜措て月を経るまで沙汰もなく。今更ゆ拿出して。婚姻の目録ゆ。載んとあるこそ傍痛く。只一遍の穿議もゆ〜。縁由を藏主へ告らるべ。那御旗ハ尊くと清ハ一箇の贓物ゆ。開贓物を以て更ゆ藏主へ佳禮の信ゆ音物ゆせらるんゆ。沙汰を限ゆ〜。管領の料理とこそ道べくと。法度ハ一箇の與ゆ曲ぬを君自ら敗て。怎地ゆ向てゆ民を治ん。義持も听識なくゆ。管領の稟をまゆ〜。下賜ひ〜ゆゆ。君自ら法度を敗る。比類とやいへんぞ〜ん。説ども著く那御旗ゆ當家相傳の重宝なるべ。身ゆも家ゆも換ぐ〜。可惜〜きの際限もあ〜ぐ。然有て道の仮ゆ〜で。這身ゆ受べき所謂ハ。只盗賊ゆ掠奪〜と。室町殿の更奪ひく。拿躰ぜらるる東西とせんのゆ。争ゆ重宝欲なるべとて。開故を以て身を穢し。名を高とべき事のゆん。這等の由を脱もなく。回て復命なく。強て勧やゆふとるゆ。前ゆも既ゆ稟〜如く。ゆん眼前ゆて頭髪を截。尼法師ゆ成べきのゆ。然でも猶許されゆ

に伏て父祖の君へ黄泉にて分解し侍ふべしと言語撓まぬ烈女の辨論。舌咲らぞ逢ら
ぜ。寛氣を含くて演るれバ正直理義に逼られて默然として姑且ハ語を閉て居たりしが。
慚愧なる頭をやうやく抬げ。和女がいふ所も其理あれど今と成ては聲ぶべうもあらず在下も父
祖三代の忠勤を想ハぬにあらねども。故頭殿北朝へ一旦皈降しあひし胸在下ハ未幼弱
なりしを質として室町殿へ参せられたる故を以て詳き縡ハ知ざれど室町殿在
下を。他事なく召使れしかバ。在下も亦異心を存せず。年来忠を盡さんと想ひ玄。然
るに鹿苑院殿薨逝の後。御座の頭に奇異しき征矢あり。其ハ寛氣を復せし和
歌を彫たりしとぞ。在下ハ看する縡ぶになれど那御座邊にハ外様的の入べきすに非ざ
バ彼必密に穿鑿ありしに南朝の餘蘗なればとて先在下を忌嫌ひ終に是當將軍
家の御前を遠放られてかゝる人に釆地をも削られてしかれども照据なきにや止ぬ。
御狐疑も解るなるべし。嚮に和女郎を赦免の胸在下をも免許ありて加恩の地をも

賜ひしかバ。左右なき御恩を受戴きて忠義を盡さんかと思へり。然れバ和女郎に忌ず
とも辞をべきすぢあれど。太上天皇の勅諚を固辞奉る程なれバ嚮に室町殿
より一千金を賜ひしも全足利家の吹挙なるに其をバ辞せバ既にて今番婚姻の
一条をバ怎か强面く辞し奉るを道せも果ど。姑摩姫ハ容貌を佗と改めて。其ハ
日ならずあらう。那胸の二千金ハ艸々にもあれ室町殿を刺んとしうる志を忠孝とし
て愍ませたまひし勅命なるに。父祖の忠義と奴家が孤獨を恵ませたまふとあるう
故を以て遁るゝ道なく拜領しつ。今番ハ其とハ等しからぞ。御拯言汭の御受禪も
近きにあらんといふぞからぶ。縡の黒白も定らぬに。父祖累代の怨敵なる畠山と縁を
結べと仰られて院宣ハ憚すからあん僻事欲除非両朝の義なりぞとも。君に大ト
きあん僻事の御坐まさバ几番も念直させたまへんずらに。御諷諌とも禀上げまし
枕聞食容られずバ死をもて争ひまうすが忠臣の道とハおぼさずや。况や愆るあん

企ハ君の御本意なるべきものを。室町殿ハ他人の忠義と。押て画餅ふ做せらるゝ。欣是
亦人君の道とハあぞえば。所詮氷炭薫蕕の差別もあゝ強敢ふ。院宣御諚と宣へ
も。上の御與ふも宜うもそ。父祖の志なる兵淳ふ従ひをつべくハ非ど。這義を尋会しゐへ
う〜と念慮の隨ふ言懲せバ正直再遍説べきやうあゝ。黄蘖を舐ゑ〜唖児の般く。
頸を垂て惘然と困ゞ果てぞ居うるる。這回抗も淳長ゝまど。楮数ふ定限あと
ハ巻を換て次下の回第四十三回の首ふ分解るを看て識べし。

平惣治

開巻驚奇俠客傳第五集巻之一 終